第 4 章

休校期間中の家庭学習に対する中高生の取り組み

小野田　亮介*

第 4 章まとめ

●休校期間中の家庭学習で、知識を身につけたり、思考を深めたりする学びができたと評価する生徒の割合（約 4 ～ 6 割）に比べて、**他の人と話し合うような学びができたと評価する生徒の割合は低く、中高生ともに約 2 割**にとどまっていました。1 人 1 台のパソコン・タブレット環境だけでなく、通信環境、学習環境（勉強部屋の有無など）の家庭間差を埋め、オンラインでの話し合いの支援方法を構築することが今後の課題になると考えられます。

●中高生の**約 6 割がゲームやインターネットの誘惑に負けて十分に勉強できなかったと回答**し、**約 3 割は家で集中して学習できる場所がなかったと回答**していました。全体的傾向をふまえると、1 学級のうち少なくとも 3 割以上の生徒が利用することを想定して、通信環境の整った教室を確保する必要がありそうです。また、こうした教室開放は家庭学習でめりはりがつけられない生徒にとっても効果的な支援となる可能性があります。

●中高生の**約 5 割が休校期間中の家庭学習が充実していたと評価**していました。ただし、この評価には成績層による差がみられ、成績上位層になるにつれて充実感が高く評価される傾向にありました。家庭学習の充実感は、学習計画を立てるといった学習方略使用の傾向と正の相関関係にあったことから、**家庭学習において効果的な学習を進めるための方略を用いられるかどうかが充実感と関連している可能性**が示されました。

＊山梨大学

1．はじめに

新型コロナの流行という未曾有の事態に際し、教育関係者は子どもの学びを止めぬよう、その時々で最善と思われる支援をしてきました。とりわけ、家庭学習に対しては、ふだんの授業からなるべく質を落とさないように、教材づくりや指導方法に様々な工夫がなされてきたと思われます。こうした状況下において、子どもたちはどのように家庭で学び、その学びをどのように捉えているのでしょうか。これらの点を明らかにすることは、今後の遠隔教育の在り方を論じる上で重要な示唆を提供することはもちろんのこと、将来的に類似する事態が発生した際の教育的対応を考える上でも不可欠な情報となるでしょう。

本章では、2020年8月から9月に実施された「中高生のコロナ禍の生活と学びに関する実態調査」（以降、「中高生コロナ調査」）のうち、休校期間中の学習内容や学習方法に対する調査結果について、(1) 家庭学習の内容、(2) 家庭学習に対する生徒の認識、(3) 家庭学習における学習方略の3観点から概観します。いずれの観点についても、休校期間中の家庭学習を生徒がどのように捉えているかについて検討しますが、適宜、コロナ流行の前年に実施された「子どもの生活と学びに関する親子調査2019」（以降、「親子調査2019」）の結果を参照します。両調査は完全に対応しているとはいえませんが、ふだんの授業に対する生徒の回答と、休校期間中の家庭学習に対する生徒の回答を相対的に捉える上では有用な情報になると思われるためです。

また、「成績層」ごとの比較を行う部分もあります。成績層とは、2020年7月から9月に実施された「親子調査2020」において、生徒自身が自分の成績を自己評価した結果をまとめ、下位層、中位層、上位層の3群に分けたものとなります。成績層によって学習の仕方が異なり、さらにそれが家庭学習への充実感などと関連しているとすれば、たとえば、充実感を高く評価している層の生徒が用いている学習方略を他の層の生徒にも教示するなど、具体的な支援策について考えることが可能となります。

なお、本章では中学生、高校生の区別を必要としない場合に、文脈に合わせて「中高生」や「生徒」といった表現を用いることにします。また、コロナ流行前の学習（授業）を「ふだんの学習（授業）」と表現する箇所もあります。

2．中高生は家庭学習で何を学び、経験していたか：学習内容の分析

まず、中高生が家庭学習で学んでいたことについてみていきます。ここでは、ふだんの学習内容も家庭学習の特徴を捉える上で参考になると考え、「親子調査2019」のうち、関連する質問項目の結果も提示します。

2.1. 知識を身につけ、思考を深める学習経験について

知識を身につけたり、思考を深めたりすることは、ほとんどの学習活動の目標になると考えられます。ここでは、生徒がそれらの学習をどの程度経験していたかについて、**【図4－1】**にまとめて紹介します。

休校中に「知識を身につけるような学び」をできたと評価する生徒は中学生の約5割、高校生の約6割であり、「何かについて深く考えるような学び」をできたと評価する生徒は中学生の約4割、高校生の5割弱となっています。これらの質問は、「どれくらいできたか」という達成度を含む問い方をしているので、知識を身につけたり、思考を深めた

りするための課題がどの程度出されていたかについては判断できません。一方、「親子調査 2019」の結果をみると、ふだんの授業ではドリルやプリントの問題を与えることや、グループで調べて考えるといった活動によって、これらの学びに関連する学習機会が多く提供されていたことが示唆されます。ふだんの授業と同量の課題を家庭学習で実施することは生徒だけでなく教員にとっても負担が大きいと思われますから、課題量を減少させた上で生徒の達成度を維持、向上させるための工夫が必要になると思われます。後述する学習方略の工夫などはその一助になると考えられます。

図４－１　家庭学習での学び、経験

※「親子調査 2019」では「この１年くらいの間に、学校の授業で、次のようなことはどれくらいありましたか」という質問に対して「よくあった」「ときどきあった」と回答した生徒の比率を示す。
※「中高生コロナ調査」では「休校期間中に、次のような学習（学びや経験）はどれくらいできましたか」という質問に対して「たくさんできた」「まあできた」と回答した生徒の比率を示す。

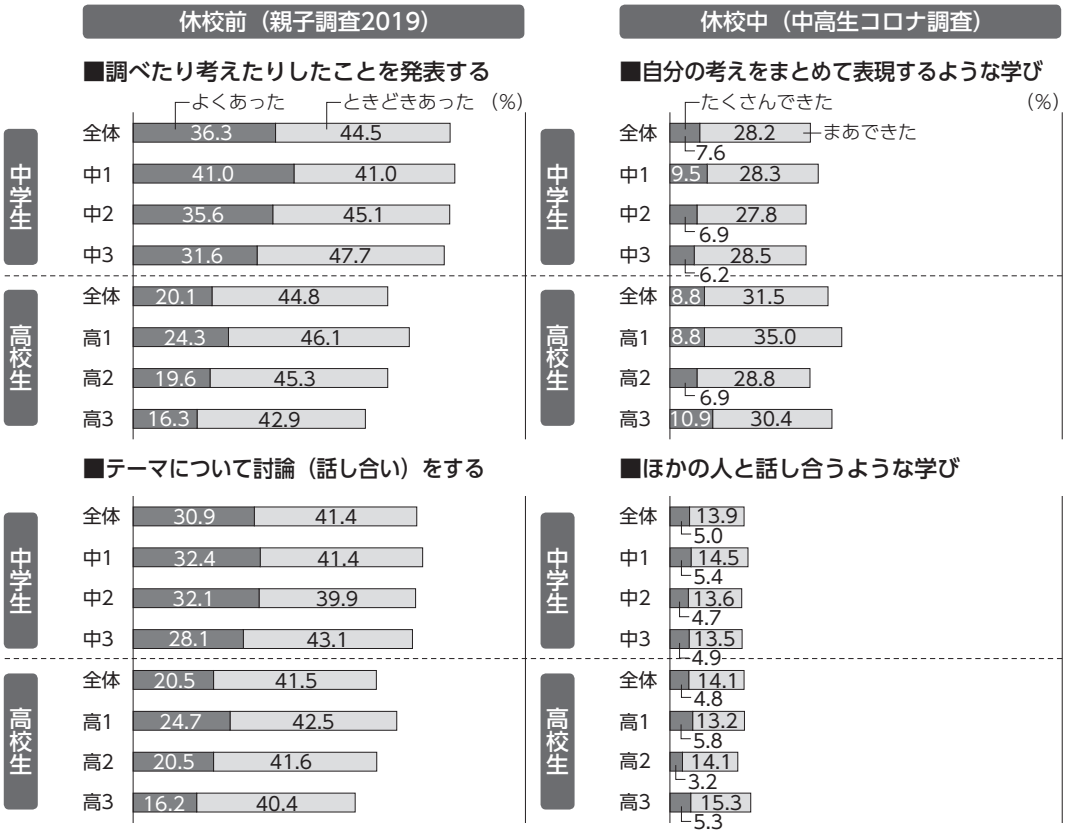
「勉強の内容や方法をいろいろと考える経験」は約４割の生徒ができたと回答しており、この割合は「親子調査 2019」の質問項目の結果とも類似しています。自分の学習方略を見直すことは学習の効果を高める上で不可欠であり、とりわけ、自分がペースメーカーになる家庭学習においてその重要性は一層増すと考えられます。家庭学習ではふだんの授業よりも積極的に学習を振り返り、自分の行動を適切に調整する必要があるといえるでしょう。もちろん、これらは一朝一夕では達成できませんから、ふだんの授業から学習方略や計画の立て方を内省するように促し、学習の振り返りを日常化させる必要があります。また、家庭内でも学習を振り返ったり、学習を調整したりする方法について考えさせる機会の提供が必要かもしれません。

2.2.　主として他者と進める学習について

他者とかかわりあいながら進める学習は、学習指導要領（平成 29・30 年告示）で重視される「主体的・対話的で深い学び」とも密接にかかわっています。休校措置により、少なくとも物理的な対話的活動の機会は制限されましたが、生徒からみて他者とかかわる学びの活動はどの程度あったのでしょうか。**【図４－２】**に、主として他者との間で行われる学習や経験に関する質問項目の結果を示します。

「自分の考えをまとめて表現するような学び」については、ふだんの授業で行われていた発表活動に比べれば回数が減少していた可能性はありますが、休校中も約４割の生徒ができたと回答しています。家庭学習で自分の考えを表現する活動としては、オンライン

図４－２　家庭学習での表現や話し合いに関する学び



※「親子調査 2019」、「中高生コロナ調査」の質問は、図４－１と同様。

で発表するといったプレゼンテーション活動だけでなく、調べたことをレポートとして報告したり、自分の考えを意見文、小論文として発信したりする活動も含まれます。とりわけ、書きことばで表現された成果物は遠隔であっても共有しやすいため、文章産出の機会を増やすことなどによって、自分の考えを表現する学びの機会は保障しやすくなると考えられます。

一方、「ほかの人と話し合うような学び」ができたと回答する生徒は約２割にとどまりました。この結果は、おそらく学校教育にかかわる方々にとって予想通りだったのではないでしょうか。この問題は、生徒に１人１台の自由に使えるタブレットやパソコンを与えれば解決するといった単純な問題ではありません。後述するように、通信環境や学習環境には家庭間差がありますし、オンラインでは話し方や聞き方について対面とは異なるスキルが要求されるため、生徒がふだんよりも一層やりにくさを感じる可能性も十分に予見されます。そのため、授業者側としては物理的な環境が整っていたとしても、話し合い活動の導入に躊躇せざるを得ない部分があったのではないでしょうか。今後、オンラインでの話し合い活動を推進するのであれば、通信環境の整備はもちろんのこと、オンラインに特化した話し方や聞き方、ルールについての指導方法も並行して開発する必要があると考えられます。

３．中高生は休校期間中の家庭学習をどう捉えているか：学習に対する認識の分析

この節では、中高生が自身の家庭学習をどのように捉えていたかについてみていきます。なお、ここでは休校期間中の家庭学習に限定的な質問を扱うので、「親子調査 2019」の結果は参照していません。

3.1.　家庭学習に対する負担感、不安、やる気

【図４－３】には、休校期間中の学習に対する生徒の評価のうち、負担感や不安、やる気の停滞といったネガティブな質問に対する回答結果を示します。

「学校の宿題がたいへんだった」への回答結果からは、中学生の約６割、高校生の約７割が宿題を大変だったと認識していることがみてとれます。休校期間中には、ある程度の進度を保つために様々な宿題が課されたと思われます。それは、ふだんの授業で課される補足としての宿題とは質的、量的に異なっていたはずで、生徒にとっては負担感の高い内容となっていたと推察されます。その意味で、休校期間中の宿題に対して負担感が高く認識されることは当然であり、必ずしもネガティブな結果とはいえないかもしれません。ただし、その負担感に伴い「一人で勉強するのがつらかった」「自分だけ勉強が遅れていないか不安だった」と感じる生徒が約４割～５割程度いることには留意が必要でしょう。家庭での学習はどうしても生徒個人に閉じた学習になりがちですから、学級内で学習の進め方や工夫の仕方を共有するなど、負担感を低減するための支援を行うことも重要だと考えられます。

そして、やはり目を引くのは「ふだんよりも勉強のやる気が高まらなかった」と感じる生徒が７割以上認められたことです。「やはり教育は対面であるべきだ」と主張したくなる結果ですし、少なくとも、生徒のやる気をどう高め、維持するかが遠隔授業や家庭学習の重要な課題となることは間違いなさそうです。ただし、この結果だけで遠隔授業や家庭学習の是非を論じることは性急に過ぎるといえるでしょう。この質問の仕方ですと、ふだんとやる気が変わらなかった生徒も「あてはまる」と回答する可能性があります。「高まらない」ことは、必ずしも「低下する」こと

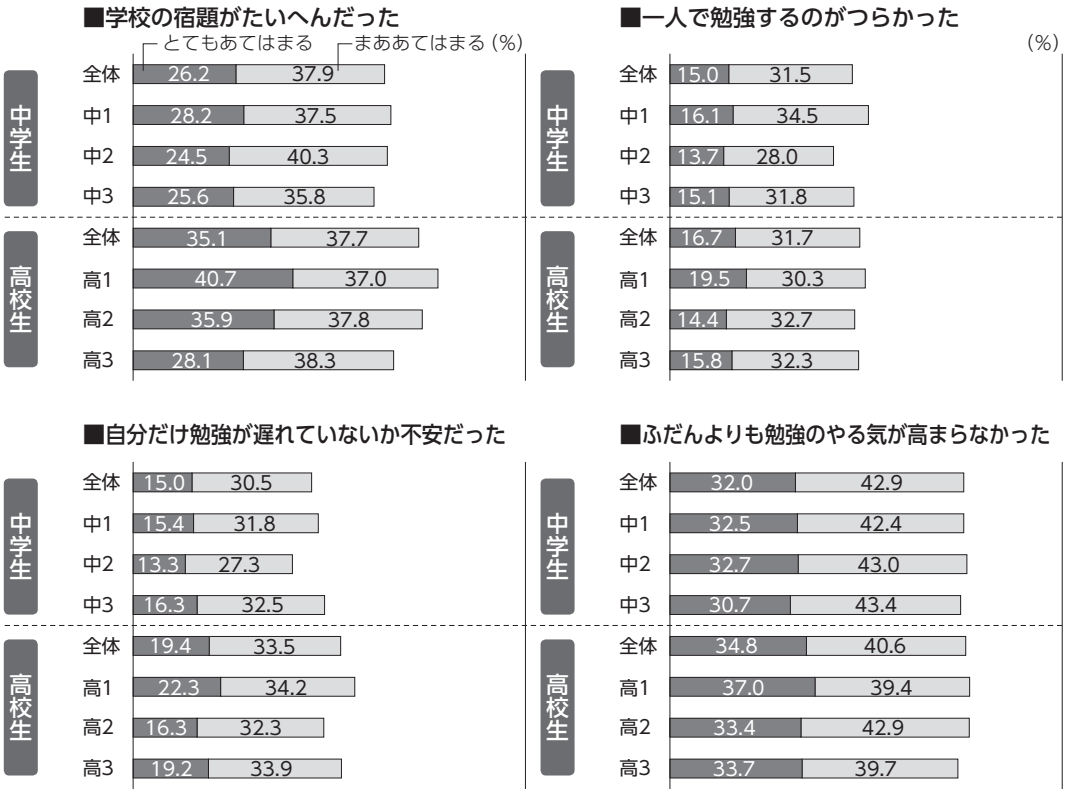
を意味していませんから、ふだんの授業よりも家庭学習がやる気を低減させていたとはいいきれません。また、家庭学習であったこと自体が生徒のやる気に影響を与えていたのか、それとも他の要因が影響していたのかについて、この調査結果だけでは判別できません。たとえば、家庭学習用の適切な教材を提供できていれば、学習の達成度とやる気は維持されていたかもしれません。あるいは、遠隔授業の方法が洗練されることで、クラスメートとのつながりが維持され、質疑応答がよりやりやすくなるといった発展がみられた場合、対面を上回る教育効果が得られる可能性もあります。対面か遠隔かという形式にこだわらず、十分な水準の教育を実現するために何が必要であるかという改善に向けた建設的議論が必要だと思われます。

3.2.　家庭学習の方法や学習環境

学校での授業と異なり、家庭学習では教員が適切な学習方略を教えてくれるわけではありません。また、インターネットやゲームといった誘惑もありますし、兄弟姉妹と部屋を共有していたり、リビングで学習していたりする場合には、そもそも学習に集中しにくいという問題も生起します。これらの点について、**【図４－４】**に示す休校期間中の学習方法や学習環境に対する回答結果から考えていきたいと思います。

「学校がなくても自分だけで勉強できると思った」と評価する生徒は、中高ともに約３割であり、高校３年生で若干その割合が増加して約４割になっています。この値は必ずしも学校が不要だと評価した生徒の割合を示すわけではありません。たとえば、課題さ

図４－３　家庭学習に対する負担感、不安、やる気の停滞



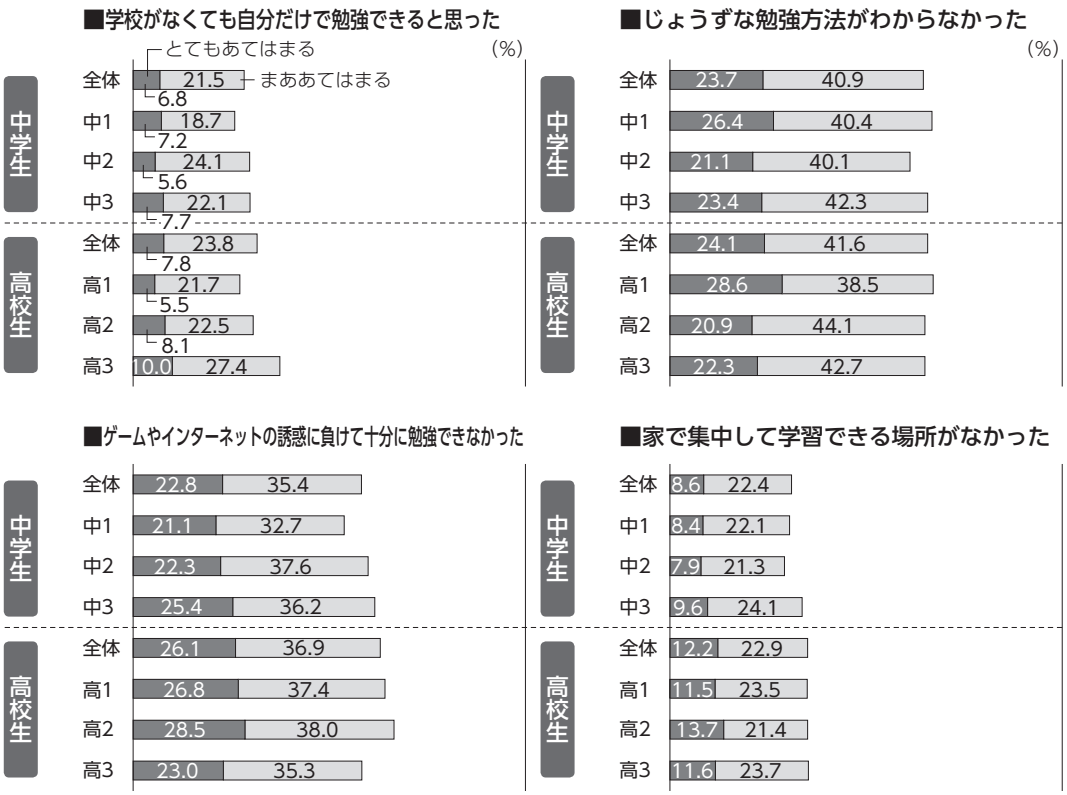
※「休校期間中の家庭学習について、次のようなことはどれくらいあてはまりますか」という質問に対して「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した生徒の比率を示す。

え与えてもらえれば自分だけで学習できるといったように、「学校がなくても＝学校に登校しなくても」と捉えて回答した生徒がいた可能性があります。学校がなくても自律的に学習を進められると評価した生徒数として解釈する方が前向きですし、後述する「学校で勉強することの大切さを感じた」の回答結果とも整合的だといえます。

学校の有無にかかわらず、自律的に学習を進めるためには、学習の方法を理解しておく必要があります。したがって、「じょうずな勉強方法がわからなかった」と評価する生徒が６割以上いたことは、家庭学習で実行可能な学習方略を指導する必要性の高さを示唆すると考えられます。また、「ゲームやインターネットの誘惑に負けて十分に勉強できなかった」と評価する生徒が約６割いることから、学習環境の整え方や学習時間のめりはりのつけ方についても、学習方略の一つとして指導する必要性が示唆されます。学習しやすい環境を整えたり（Pintrich et al., 1993）、学習時間のめりはりを明確化したりする（伊藤・神藤，2003）ことは、自己調整的な学習を進める上で重要な方略となります。とりわけ、家庭学習の場合は、オンラインのための通信機器がそのままゲームやインターネットのための機器にもなるなど、学習環境と娯楽環境を明確に区分することは困難です。めりはりをつけることの重要性と、その方法について指導することがふだんの授業よりも一層必要になるかもしれません。

一方、家で集中して学習できる場所がない場合には、方略を指導してもその効果には限界があると思われます。家で集中できる場所

図４－４　休校期間中の学習方法、学習環境



※質問は、図４―３と同様。

がないと感じる生徒は約３割いるため、休校期間中であっても通信環境の整った教室を自習室として開放するといった対応は不可欠だといえるでしょう。それは、学習のめりはりがつけられない生徒にとっても、気分を切り替えて学習するための環境的支援として有効だと考えられます。

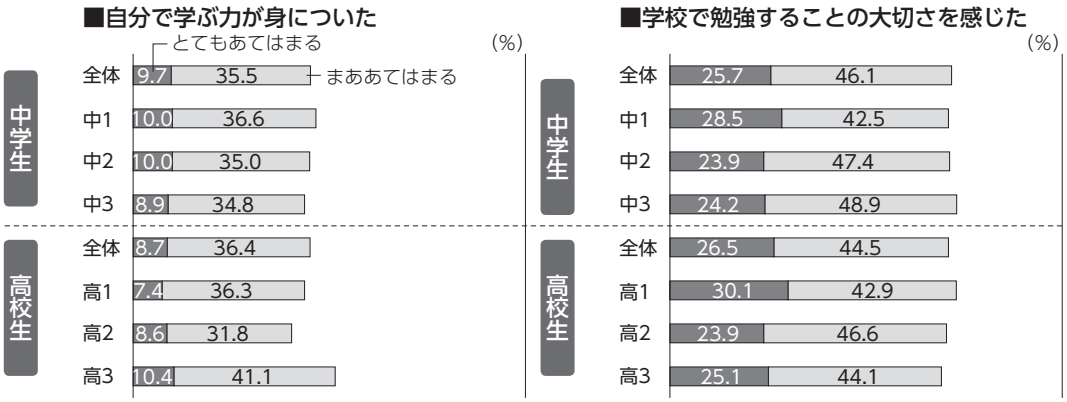
3.3.　休校期間中の家庭学習を通して感じた独力での学び、学校での学び

家庭学習を通して、生徒は独力で学ぶことや学校で学ぶことに対して、どのような認識を持つようになったのでしょうか。**【図４－５】**の結果からみていきましょう。

「自分で学ぶ力が身についた」と評価する生徒は中高ともに４割以上認められ、高校３年生では約５割が自分で学ぶ力が身についたと回答しています。生徒にとって家庭学習は必ずしも容易ではなかったと考えられますが（3.1. 項参照）、４割以上の生徒が自己調整的な学習を進める力が身についたと感じるような学習経験を積むことができたといえます。もちろん、そう感じられなかった生徒に対する支援が必要なのは言うまでもありませんが、自分で学ぶ力を身につけたと感じられる生徒がいたことは前向きに捉えられる結果であり、そうした生徒の学習方法を共有したり、指導方法に反映させたりすることが必要だと考えられます。

また、「学校で勉強することの大切さを感じた」と評価する生徒が中高問わず７割程度認められたことも注目に値します。一人で学習することに不安を感じたり、学習環境が整っていなかったりする生徒にとって、学校は重要な場所になっていると考えられます。さらに、教員やクラスメートと交流する「居場所」としての機能も、学校で学習することの重要性が高く評価された要因の一つかもしれません。一例として、「学校で勉強することの大切さを感じた」の項目得点と、関連する項目との相関係数を確認すると、「一人で勉強するのがつらかった（中学生：r ＝ .29、高校生：r ＝ .40）」、「自分だけ勉強が遅れていないか不安だった（中学生：r ＝ .33、高校生：r ＝ .41）」となっており、弱～中程度の相関関係にあることがみてとれます。クラスメートと一緒に学習したいと考える生徒にとって学校は重要な場所であり、そうした生徒に対してクラスメートと交流する環境、機会をどのように提供できるかも、遠隔教育を考える上で重要な検討課題になるでしょう。

図４－５　自分で学ぶことと学校で学ぶことに対する生徒の認識



※質問は、図４―３と同様。

3.4.　家庭学習の充実感

最後に、休校期間中の家庭学習を生徒がどれほど充実していたと捉えていたかについて分析します。また、**【図４－６】**に示すように、ここでは成績層によって充実感の評価にどのような差があるかも検討します。

全体的に中学生と高校生では明確な差は認められず、約５割の生徒が充実していたと回答していることが分かります。一方、成績層に着目すると、成績上位層になるにつれて充実感が高く評価されており、下位層と上位層の差は中学生も高校生も 22.2 ポイント開いています。成績上位層の生徒が家庭学習においても比較的充実した学習を進められたのはなぜでしょうか。その理由の一つには、自分で学習を効果的に進めていくための自己調整的な学習方略の用い方があると考えられます。次の節では、この学習方略に注目した分析を行います。

４．　休校期間中に生徒はどのように学習していたか：学習方略の分析

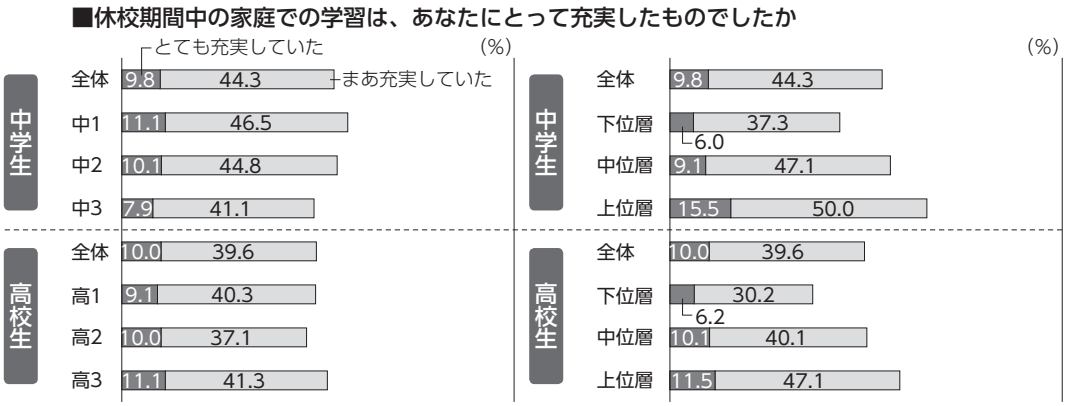
本節では、自己調整的な学習を進めるために、生徒がどのような方略を用いていたかについて分析します。また、ここでは回答結果を学年ごとではなく、成績層ごとにみていきます。そうすることで、成績層にかかわらず必要とされる支援と、特定の層に特に必要とされる支援について検討できると考えられるためです。さらに、第２節と同様に、「親子調査 2019」の類似する質問項目の結果も参照のために提示します。「中高生コロナ調査」で学習方略の用い方に成績層間の差がみられた場合、その差は「休校期間中に生起した（あるいは増大した）差」である場合と、「ふだんから存在していた差」である場合の二つが考えられます。2019 年の調査結果を参照することで、これらを弁別的に捉えることが本節のねらいとなります。

4.1.　学習の工夫

まず、休校期間中の学習について、自分でやり方を工夫していたかどうかについて確認してみましょう。**【図４－７】**に該当する質問項目の結果を示します。

「親子調査 2019」と「中高生コロナ調査」に共通しているのは、学習のやり方を工夫する生徒の割合は成績上位層で高く、下位層になるほど減少するということです。上位層と下位層の差をとってみると、「親子調査 2019」の中学生で 32.4 ポイント、高校生

図４－６　家庭学習の充実感



※「休校期間中の家庭での学習は、あなたにとって充実したものでしたか」という質問に対して「とても充実していた」「まあ充実していた」と回答した生徒の比率を示す。

で 27.8 ポイントの開きがあり、「中高生コロナ調査」の中学生で 21.6 ポイント、高校生で 21.9 ポイントの開きが認められます。学習時に工夫するかどうかという傾向は、休校により差が拡大したというよりも、ふだんの学習時に存在していた差が家庭学習でも反映されたと考える方がよさそうです。

一方、両調査の違いとして、「親子調査 2019」に比べて、「中高生コロナ調査」の方が「勉強のやり方を工夫した」と回答する生徒の割合が低いことがみてとれます。両調査は質問の仕方や想定する活動、時期が異なるので単純に値を比べることはできませんが、成績上位層の生徒の中にも、ふだんに比べて家庭学習では勉強の工夫が困難であったと回答する生徒が含まれていたと推察されます。

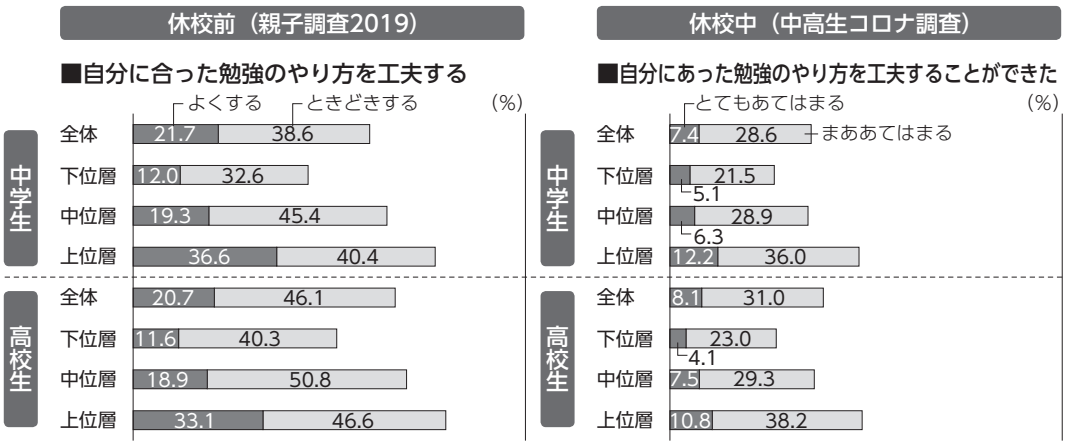
4.2. 学習計画

次に、家庭学習の計画に関する回答結果をみていきます。なお、「親子調査 2019」では「計画通りに勉強が進まないときは見直して調整した」という項目に類似する項目がなかったため、**【図４－８】**には自分の学習行動を確認するかどうかに関する項目の結果を示しています。

学習の工夫と同様に、学習計画を立てたり、計画に合わせて行動したりする生徒の割合は成績上位層で高く、下位層になるほど減少する傾向が認められました。計画を立てて勉強したかどうかに関する項目の回答をみると、上位層と下位層の差は、「親子調査 2019」では中学生も高校生も 24.5 ポイントとなっており、「中高生コロナ調査」では中学生で 25.4 ポイント、高校生で 25.3 ポイントの開きが認められます。学習計画に関する方略の傾向についても、ふだんの学習時に存在していた差が家庭学習でも反映されたと考える方がよさそうです。

一方、両調査を比較すると、「親子調査 2019」に比べて、「中高生コロナ調査」の方が「計画を立てて勉強ができた」と回答する生徒の割合が 1 割程度低いことがみてとれます。この差をどう捉えるかは難しいところですが、全体的傾向として、家庭学習で計画通りに学習を進めることは、ふだんよりも困難であった可能性があると考えられます。

図４－７　学習方略：勉強方法の工夫



※「親子調査 2019」では「あなたは、勉強するときに、次のことをどれくらいしますか」という質問に対して「よくする」「ときどきする」と回答した生徒の比率を示す。
※「中高生コロナ調査」では「休校期間中の家庭学習について、次のようなことはどれくらいあてはまりますか」という質問に対して「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した生徒の比率を示す。

4.3.　他者とのかかわりの中での学習

学習内容が分からないときに教員などの他者に援助を求めること（Pintrich et al., 1993）や、友人と学習すること（伊藤・神藤，2003）は、学習への動機づけを維持する上で重要な方略となります。そこで、最後に休校期間中の家庭学習において、生徒が他者とどのようにかかわって学習していたかを検討します。なお、**【図４－９】**に示す通り、ここでは他者として友人と家族を取り上げています。

休校中に「友だちとメールやＳＮＳで勉強についてやりとりをした」と回答した生徒の割合をみると、中学生よりも高校生で割合が高くなっていることがわかります。これは、自由に使える携帯電話やスマートフォンの使用率を反映したものと考えられます。図示はありませんが、2020 年に実施した「子どもの生活と学びに関する親子調査」（親子調査 2020）では、中学生の 58.2％、高校生の 93.6％が自分専用のスマートフォンを使っていることが示されています。そのため、休校期間中であっても、高校生は中学生に比べてより活発に学習についてのやり取りができたのだと考えられます。「教えあい」が行われていたかどうかは分かりませんが、少なくとも高校生に関しては、ふだんとさほど変わらずに学習に関するやり取りがなされていたといえるでしょう。一方、中学生については、ふだんに比べて学習に関する友だちとのやり取りは減少していたといえます。家庭学習が中心となる状況下では、友人とつながる方法を持たない生徒に対して、友人と交流するための機会を与える支援が必要になると考えら

図４－８　学習方略：勉強の計画

※「親子調査 2019」、「中高生コロナ調査」の質問は、図４－７と同様。

れます。たとえば、オンライン授業の中で、クラスメートと情報を交換できるような時間を提供することは、そうした機会の一つとなるかもしれません。

両親や家族から勉強を教えてもらったり、勉強の仕方を考えてもらったりする経験については、高校生に比べ、中学生でより多く行われていることがみてとれます。高校では学

図４－９　学習方略：他者とのかかわりの中での勉強

※「友だちと勉強を教えあう」の項目については、「親子調査 2019」の「あなたは、勉強するときに、次のことをどれくらいしますか」という質問に対して「よくする」「ときどきする」と回答した生徒の比率を示す。

※「勉強の内容を教えてくれる」「勉強の計画の立て方を教えてくれる」の２項目については、「親子調査 2019」の「お父さんやお母さんについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか」という質問に対して「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した生徒の比率を示す。

※「中高生コロナ調査」では「休校期間中の家庭学習について、次のようなことはどれくらいあてはまりますか」という質問に対して「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した生徒の比率を示す。

習内容の専門性が高まることもあり、勉強について家族が直接的に指導、支援する機会は減少するのだと考えられます。また、「親子調査 2019」と「中高生コロナ調査」で回答者の割合が大きく異なっていないことも注目できます。あくまで結果からの推測となりますが、ふだんから家族と学習についてかかわりを持っている生徒は、休校期間中もやはりかかわりを持ち続け、ふだんから家族と学習についてかかかわりを持っていない生徒は、休校期間中の家庭学習においても家族とかかわりを持たないのかもしれません。家族とのかかわりが生徒の学業成績や動機づけにどのような影響を与えるかについては今後の詳細な分析を待つ必要がありますが、家にいるからといって「自然に」親子間で学習についてのやり取りが活性化したり、増加したりするわけではないという点には留意が必要でしょう。遠隔授業や家庭学習に家族のコミットメントを求める場合には、自然発生を待つのではなく、子どもと勉強のことについて話して欲しい、という明確なメッセージを発信する必要があると考えられます。

なお、友人、家族とのかかわりのいずれについても、成績層による大きな差はないことが示唆されました。ただし、この調査では他者とのかかわりの質については分かりません。同じように勉強について話していたとしても、ある家庭では質の高い学習方略が教示され、別の家庭ではそうした教示は行われないかもしれません。こうした友人間、家族間の交流の質とその影響については、より詳細かつ長期的な調査による検証が必要になると思われます。

4.4.　家庭学習の充実感と関連する要因

ここまで、休校期間中の家庭学習に対する生徒の取り組みや認識について概観してきましたが、「この学習方略を用いる生徒ほど、家庭学習を充実していたと評価する」といった変数間の関連については言及してきませんでした。紙幅の都合もあるため、ここでは各学習方略と家庭学習への充実感の関連を検討します。

【表４－１】に示す「相関係数」は二つの変数間の相関関係を示す値で、－１から１の値をとります。－１に近づくほど負の相関関係が強く、１に近づくほど正の相関関係が強いことが示唆され、$0<|r|\leq 0.2$ で「ほとんど相関なし」、$0.2<|r|\leq 0.4$ で「弱い相関あり」、$0.4<|r|\leq 0.7$ で「中程度の相関あり」、$0.7<|r|\leq 1.0$ で「強い相関あり」と解釈されるのが一般的です（e.g., 山田・村井, 2004）。

以上をふまえて表４－１をみると、「勉強の工夫」、「勉強計画を立てる」、「勉強計画の調整」では、中学生と高校生の両方で中程度の相関関係が認められます。自分の学習を自分で調整できていたと回答する生徒ほど、充実感を高く評価する傾向にあったといえるでしょう。一方、他者とのかかわりの中での学習に関する「友人とのやりとり」、「家族 _ 勉

表４－１　家庭学習への充実感と自己調整的学習方略の相関係数

	勉強方法の工夫	勉強計画を立てる	勉強計画の調整	友人とのやりとり	家族 _ 勉強内容	家族 _ 勉強方法
中学生	.48**	.45**	.36**	.04	.17**	.12**
高校生	.51**	.49**	.40**	.09**	.17**	.16**

※各変数の名称と質問項目の対応は以下の通り。「勉強の工夫（自分にあった勉強のやり方を工夫することができた）」、「勉強計画を立てる（計画を立てて勉強ができた）」、「勉強計画の調整（計画通りに勉強が進まないときは見直して調整した）」、「友人とのやりとり（友だちとメールやＳＮＳで勉強についてやりとりをした）」、「家族 _ 勉強内容（家族から勉強を教えてもらった）」、「家族 _ 勉強方法（どう勉強すればよいかを家族が考えてくれた）」

※表中の値は「休校期間中の家庭での学習は、あなたにとって充実したものでしたか」という質問への回答得点と、学習方略に関する各質問項目への回答得点の相関係数を示す。

※ ** $p < .001$

強内容」、「家族 _ 勉強方法」ではほとんど相関関係が認められませんでした。これらの方略は必ずしも家庭学習への充実感と強い関連性はなかったと考えられます。

その他の変数の影響を考慮した分析を行うことで、ここでみた相関関係が変化する可能性はあります。しかし、紙幅の都合から結果は掲載していませんが、子どもの性別、学年、成績層、世帯の経済状況などの影響を統制しても、やはり同様の傾向は認められました。したがって、充実した家庭学習を実現する上で、個人内で用いる学習方略の重要性は高いと結論づけてよいと思われます。

5．おわりに

5.1. 家庭学習で生徒は何を学び、何を学べなかったのか

学習内容に関する質問項目の結果でまず注目できるのは、ほかの人と話し合うような学びをできたと評価する生徒が約２割にとどまっていたことです。この背景には、通信環境の家庭間差に加え、対面と同様に話し合いを行うことの難しさがあったと推察されます。オンラインに合わせた話し合いの支援として、ふだんより少人数でグループを設定したり、参加できない生徒のために発話記録をとって共有したりするなどの工夫が必要になると考えられます。また、チャットを使ったり、メールで意見を交流させたりするなど、発話以外の方法で対話的学習の機会を保障することも視野に入れる必要があるでしょう。

一方、知識を身につける学びについては中学生の約５割、高校生の約６割ができたと評価し、思考を深める学び、勉強の内容を考える学び、自分の考えを表現する学びについては、約４割の生徒ができたと評価していました。この割合が高いかどうかは、少なくとも、ふだんの学習に対する評価と比較しなければ判断できません。それでも、この割合を高めるための工夫は不可欠であり、家庭学習用の教材やツールの開発、学習方略の教示によって、学びの達成度と充実感を高める必要があるといえるでしょう。

5.2. 生徒は休校期間中の家庭学習をどのように捉えていたか

図４－３から示されるように、宿題への負担感や、家庭学習へのやる気の低下を多くの生徒が感じていたといえます。教育心理学の研究では、効果的な学習方略を用いることがその後の動機づけを高める可能性が指摘されてきました（e.g., 岡田 , 2007；小野田 , 2020）。したがって、こうした生徒に対しては学習方略の教示が有効な支援となる可能性があります。また、教員とクラスメートがアクセスできる学習用の掲示版、チャットルームなどを設定し、わからない部分や学習方略を書き込み合うなど、援助要請を促すことも効果的かもしれません。オンラインでの学習方略支援の方法については、まだ情報が十分に整理されていないため、学術的、実践的知見を収集し、発信していくことが研究者にも求められているといえるでしょう。

また、学習環境を整えることも不可欠です。ゲームやインターネットの誘惑に負けたと回答する生徒は中高で６割程度認められますし、そもそも家で集中して学習できる場所がなかったと回答する生徒も中高で３割程度認められました。個々の学校、学級の状況を考慮することは不可欠ですが、全体的傾向をふまえると、１学級のうち少なくとも３割以上の生徒が利用することを想定して通信環境の整った教室を開放する必要がありそうです。

一方、前向きになれる結果もいくつか示されています。たとえば、中高生の４割以上が自分で学ぶ力がついたと評価し、成績層間の

差はありながらも、約５割が家庭学習を充実していたと評価していることは、急激な状況変化の中での回答であることを考慮すると、前向きに捉えられる結果だといえるでしょう。また、中高生の約７割が学校で勉強することの大切さを感じたと評価していたことも学校教育の関係者にとって励みになります。ただし、これらの結果や家庭学習の達成度の低さから、対面こそ教育の理想的方法であると断定し、遠隔教育を排する方向へ進むことは、将来的な学習のあり方を考えると、望ましくない動きだといえるかもしれません。今後、ツールや教材の開発、オンラインでの授業方法の発展により、学習の質や動機づけが改善される可能性は十分にありますし、コロナの流行が落ち着いたとしても、オンライン授業など遠隔教育の需要は低下しないと予想されます。今後、オンライン授業の質を高める方策を練ることも、教育関係者にとって重要な課題になるといえるでしょう。

5.3.　生徒はどのように家庭学習を進めていたか

主として生徒が独力で実行する学習方略については、成績下位層の生徒よりも上位層の生徒の方が実行できており、家庭学習の充実感とも正の相関関係にありました。一方、他者とのかかわりの中で学習を進める方略には成績層による明確な差は認められず、家庭学習の充実感とも正の相関関係はほとんど認められませんでした。家庭学習の充実感については個人内での学習方略との関連の方が強かったといえるでしょう。

ここで注目できるのは、ふだんの方略使用の傾向が家庭学習に反映される傾向にあると考えられる点です（実際に、「親子調査2019」と「中高生コロナ調査」における学習方略に関する類似項目間には中程度の相関関係（r ＝ .29 ～ .44）が認められます）。効果が高いとされる学習方略の中には、生徒にとってコスト感が高いものがあり（例．問題を解いた後にさらに別の解き方を考える）、独力での方略使用は難しい場合もあります。したがって、くり返しとなりますが、ふだんの授業で教員が学習方略について教示し、方略が効果的な場面や、方略使用の効果を体験させる指導を行うことが、家庭学習の質を高める上でも不可欠だといえるでしょう。

【参考文献】

伊藤崇達・神藤貴昭 , 2003,「中学生用自己動機づけ方略尺度の作成」『心理学研究』74：209-217.

岡田いずみ , 2007,「学習方略の教授と学習意欲―高校生を対象にした英単語学習において―」『教育心理学研究』55：287-299.

小野田亮介 , 2020,「学習方略の使用は勉強への動機づけにどのような影響を与えるか」東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所（編）『子どもの学びと成長を追う―2 万組の親子パネル調査から』勁草書房 , 220-240.

Pintrich, P. R., Smith, D. A. F., Garcia, T., & McKeachie, W. J. (1993). Reliability and predictive validity of the motivated strategies for learning questionnaire (MSLQ). Educational and Psychological Measurement, 53, 801-813.

山田剛史・村井潤一郎 , 2004,『よくわかる心理統計』ミネルヴァ書房.